

2018

日本ブランド 発信事業

2018年3月1日(木)より3月9日(金)

竹

「竹工芸 講演・ワークショップ」

～ 伝統とは挑戦なり ～

四代 田辺竹雲齋

竹工芸家

日本ブランド発信事業目的地

- ノルウェー (オスロ)
- ロシア (サンクトペテルブルグ)

平成30年



ノルウェー(オスロ)

Kunsthøgskolen I oslo

Oslo National Academy of the Arts

<http://www.khio.no>

私は、Kunsthøgskolen I oslo Oslo National Academy of the Arts

(ノルウェー国立美術アカデミー)にて、

3月2日(金) 10:30より講演、13:30より約20名のワークショップ、
3月3日(土) 10:30より講演、13:30より約20名のワークショップを
させていただきました。

また、3日(土)の17時より、ドリンク形式のレセプション準備して下さり、
ワークショップに参加して下さった方々とゆっくりとお話する事ができました。

こちらの国立の美術学校は、最新の設備、施設の整った素晴らしい学校でした。
生徒の方も、世界中から集まり、校内の中は殆ど英語で通じました。

100年以上前の繊維工場をリノベーションし、歴史のある建物と、現代の技術が
融合されていてとても素敵な校舎でした。中心部から近いのですが、学校裏の川に
は毎年鮭も登って来るそうで、自然と学校が共存していました。

2日間、両日とも学生の方々、学校の講師の方々、学校外部の一般の皆様、
それぞれが、「竹」と言う素材をととても気に入って下さりました。

一般の部では、日本の私の工房へお越し下さったことのあるアーティストの方が、
ノルウェー国内より飛行機でお越し下さりワークショップに参加して下さりました。
本当にとっても嬉しい再会でした。「竹」や「アート」を通じて人と人が“つながり”
それが世界中につながっていける事は自分の永遠のテーマ、課題と考えております
ので本当に嬉しい再会でした。



3月2日(金) 10:30 講演1日目

Kunsthogskolen I oslo

Oslo National Academy of the Arts レクチャールーム

現在、日本人でも、「竹細工」と、「竹工芸」の違いに気づかない方もいらっしゃいます。

ですが、竹が工芸品として、独自の文化をもって発展しているのは世界で唯一、日本だけです。

世界の中で、生活に密着している「竹」が、どのように竹工芸、また、竹のアート作品に独自の発展を遂げるのかを田辺家代々の作品と共に説明させて頂きました。

竹は丈夫で弾力性があり、加工も容易な為、古来より日常生活に広く用いられてきました。

箆(ざる)や籠(かご)をはじめ、茶道具、仏具、武器、武具そして竹垣や家の内部など建築物までにみられます。

竹が生ずる殆どの国では、日常生活で使われる竹製品が作られています。ざるや買い物かご、お箸やスプーンなど多岐にわたります。

「竹」という素材は特にアジア人達にとっては生活の一部です。

その後、日本では茶道、華道によって工芸品全てが発展を遂げていきます。「竹」の工芸品もその1つです。

初代田辺竹雲齋(本名)常雄は1877に生まれます。

自宅近くで竹細工を営む家があり、幼少のころに興味を持ち始めます。

12歳で当時名工として著名であった大阪の初代和田和一斎に弟子入りし竹芸を学びます。

1901年常雄24歳の時、和一斎のもう一つの号であった「竹雲齋」を譲られ独立することになります。そこから「竹雲齋」の歴史が始まります。

初代竹雲齋を一躍有名にしたのは1914大正天皇の大阪府行幸の際、

竹雲齋の「柳里恭式釣り花籠」が展覧を賜り、献納されました。

当時天皇陛下に作品を献上することは最も名誉な事でした。そのことが和題になり竹芸家として初めて個展を開くことになります。

その後も1925年のパリ万国現代装飾美術工芸博覧会にて銅賞を獲得するなど数多くの賞を受賞。

こうして「竹」が芸術として認められていきます。

二代竹雲齋は、繊細な透かし編、

三代竹雲齋は、矢竹を使ったオブジェ作品を考案し制作しました。

Four Generation of Tanabe Chikuunsai



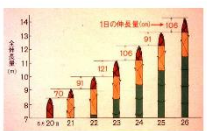
The oldest bamboo basket in Japan It celebrates 2000 years age of the ruins of hankawa, Asanot



The flower of bamboo



The growth of bamboo



The bamboo goods used in everyday life



Chikuunsai the 1st (1877-1937)

Majesty presentation work for the Emperor Taisho(1914)



Chikuunsai the 2nd

(1910 - 2000)

Demonstration at First Solo exhibition of Chikuunsai the 1st(1915)



Chikuunsai the 3rd (1940 -)

The art work
Arrow bamboo
Title "circle and direction"



Flower basket - "Basket"



Flower Basket
Title "Open work Hexagon Style"



The art work Arrow bamboo
Title "circle and straight line"



Chikuunsai IV Tanabe
(1973 -)



Original Technique of Chikuunsai IV



私の家には代々伝わる家訓があります

「伝統とは挑戦なり」

伝統とは同じものを作り続けるのではなくその代、その時代で常に新しい作品制作に挑戦をこそが伝統を作っていきます。

この精神をもとに、それぞれの代で伝統や文化の精神を受け継ぎながら哲学を持ち、新しい作品制作と価値観に挑戦をしています。

講演では、竹工芸をより深く興味を持って頂ける様に、日本独特の言い回しや、竹工芸専門の言葉の内容を理解して頂ける様に努めました。

田辺家の代々の作品の作風で竹工芸の説明後は、

私が、インスタレーションをする意義をお伝えしました。

日本だけの竹工芸の文化を広く世界に知って頂く手段として、コンテンポラリーアートの世界に竹のアートで挑戦する事は、とても大事な事と考えております。

また、それが田辺家代々の「伝統とは挑戦なり」につながり、代々の違う作品の作風でもある事もお話しました。

また、どの工芸の世界も人不足、後継者不足で後継者育成が大きな課題だと言えます。それをどう乗り越えて未来へとつなげていけるのか。その事についても講演ではお話させて頂きました。

講演内容は、ノルウェーのオスロ、ロシアのサンクトペテルブルグとも同じ内容でさせて頂いたのですが、有難い事に、両国とも「竹」に興味をもって下さり、質問も沢山して下さいました。

また、私のインスタレーションは、「虎竹」と言うとても貴重な竹で制作しております。インスタレーションは、展示期間が終わると、解いてまたその「虎竹」は再利用します。「解いた虎竹」で新たな竹の作品にと生まれ変わります。

その時は、現地の人と一緒に「虎竹」をほどくワークショップも行います。その事も、両国の方々にとても興味を持って頂きました。

両国で講演する事によって「竹」のもつ素材の素晴らしさと、日本独特の竹の技術と、「伝統とは挑戦なり」の精神が両国の方々に少しでも伝わりとても感動致しました。



3月2日（金） 13：30 ワークショップ

Kunsthogskolen I oslo

Oslo National Academy of the Arts

今年度のオスロの3月は、とても寒く日差しがあって晴れ間が見えていても－7度や、－15度など、寒い日が続いていたそうです。例年では道に雪もないそうですが、2月末まで雪が降り雪の塊や、氷ついた道路があちらこちらでまだ残っていました。ノルディックが盛んなオスロは、街の中でもスキーを担いでいる方をよく見かけます。先日まで開催されていた平昌五輪でメダルランキング金14個を含む総数39個で世界1位、冬季五輪史上最多の総メダル獲得記録となったノルウェーらしい光景だと思います。

Oslo National Academy of the Arts では、自然光が沢山入る大きな窓や、天上、吹き抜けが沢山あり日差しが美しい美術学校でした。ワークショップも自然光が入る丁度良いスペースでさせていただきました。

「世界で、1つだけの花籃をつくろう」

ワークショップでは、

「世界に1つだけの花籃」を制作します。

その前に、何種類かの「竹」を紹介します。

真竹、黒竹、虎竹、亀甲竹、煤竹などです。



竹の実演を見て頂きます。

1本の丸い竹を、どんどん割り
へいだり（厚みをうすくしたり）
幅をそろえたりしていきます。

ワークショップで使用する竹は
真竹の中でも一番良い（立派な真竹）
日本一の職人さんが手掛けた細やかに
間引きした日本一の真竹を使用します。

その真竹を丁寧に材料作りしております。
竹のヒゴは全て、1本ずつ四つ角の面取り
（角を落とす作業）をしており、
手触りもとても良いです。

まずは、前に集まってもらい、
花籃の底の編方である四つ目編みの説明です。

各自のテーブルにて1人ずつ制作して
頂きます。

竹の「身」の部分と、「皮」の部分で
四つ目編みをして頂きます。

小学生の子供達でもできる比較的簡単な
編み方ですが、実際にすると意外に
難しいと思われる方もいらっしゃると思います。
ですが、皆様上手に制作されていました。

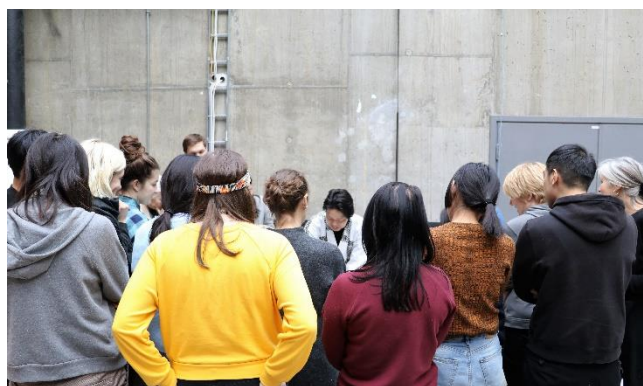
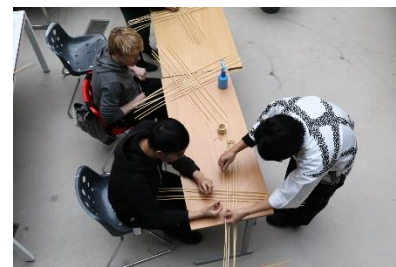
底の四つ角を竹の皮風針金で止めると、
次は立体にする作業です。

前に再度集まって頂き、
まず、竹の花籃を立体にする
伝統的な方法をお伝えします。
その後は、自分自身で、
コンセプトや想いを作品にのせて
自分のオリジナルの作品＝
世界で1つだけの作品を
制作して頂きます。



上:竹の実演

左下:花籃の底の編み方 / 右下:極細の竹のヒゴを手にとって見る生徒の方



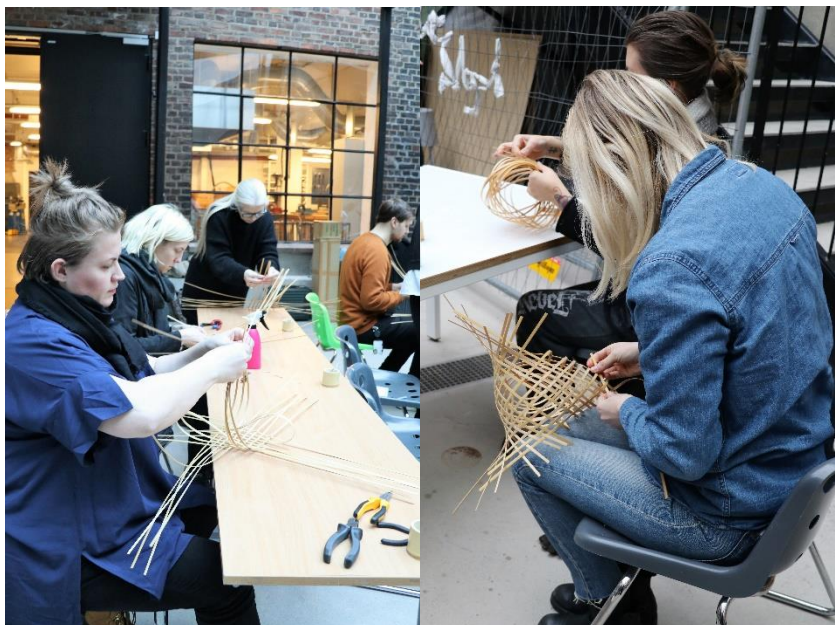
皆さん、それぞれのコンセプト、想い
アイデアで、作品を制作されています。

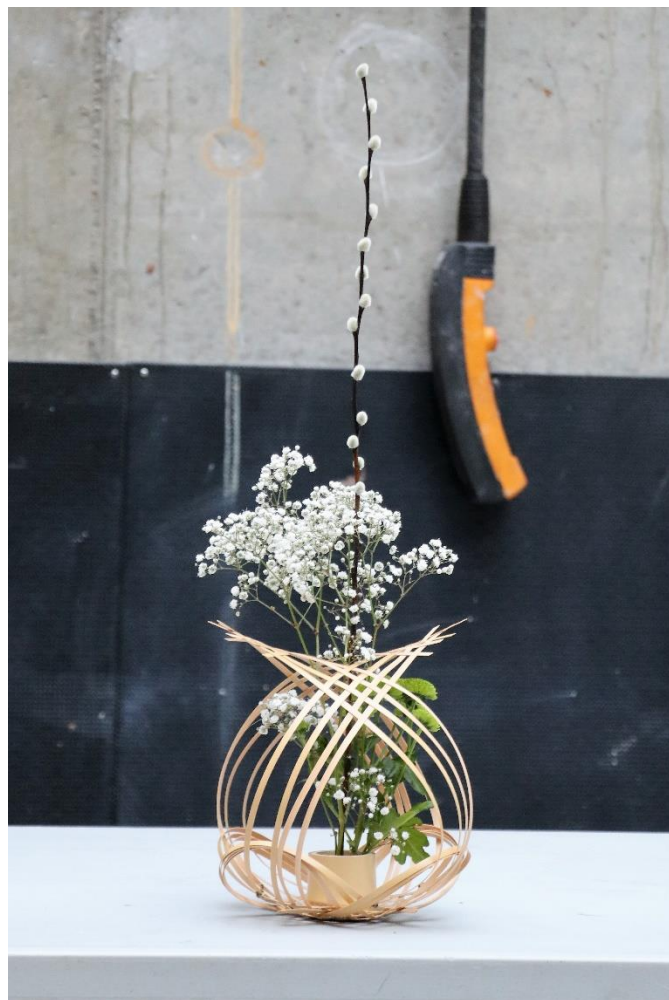
アクセサリ科の生徒の方々、
彫刻科の生徒の方々など、日ごろから手先を
使われているので、皆さん黙々と作品を
制作してらっしゃいました。

こちらの学校では、
世界からいらっしゃるので
国際色豊かで、皆様素敵な作品を制作
されていました。

花籃なので、それぞれの作品に、生け花を
して頂くのですが、生け花も初めての方も
いらっしゃり、ダイナミックな作品や繊細な
作品、個性的な作品など、スタートは一緒と
は思えないほどバリエーションがありました。

完成後は、1人ずつプレゼンをして頂きま
した。美術学校の皆様なので、プレゼンも
とても上手にされていました。





世界で1つだけの 花籃

ワークショップ1日目





3月3日(土) 10:30 講演2日目

Kunsthogskolen I oslo

Oslo National Academy of the Arts レクチャールーム2

講演2日目は、一般の方向けで行われました。

会場も移動し、パワーポイントも更に見えやすくなりました。

今回も、大変有難い事に講演後に質問して下さる方が沢山いらっしゃり、予定よりも長く質疑応答の時間を取りました。

北欧でよく見かけられる工芸の1つとして、

白樺の木や、皮の作品がありますが、会場に白樺で作品を作られる方がいらっしゃり、その方も熱心に質問して下さいました。

オスロも、生け花をされている方が多くいらっしゃって講演、ワークショップにお越し下さいました。

オスロの植物園に竹を育てている事を教えて下さったり、皆様のお心使いに本当に感謝しております。

質問される事で改めて自分自身で発見や、

気づいていなかった事に気づかされたり、また、自分では想像も考えもしなかった事を質問されたりと、凄く驚きと発見の連続でした。





ワークショップ2日目

3月3日(土) 13:00

ワークショップ

Kunsthøgskolen i oslo

Oslo National Academy of the Arts

2日目の講演後にワークショップを行いました。前日と同様、一般の方も日頃からモノに携わるお仕事をしているのかとても器用な事が多く、細やかで繊細な作品が沢山ありました。

講演の後と言う事もあり

ワークショップをする前から色々な質問をして下さいました。

素材の「竹」に興味を持って下さりました。

アジアの象徴ともいえる「竹」と言う素材ですが、繊維が細かく、良質な竹は、日本でしか自生しません。

日本の竹は、編む事に適していて細やかな作品が制作できます。



1日目のワークショップの詳細を
報告致しましたが、
最初に、竹の説明を行い
その後、デモンストレーションを行いました。



前に来ていただき、
花籃の底になる部分の編み方を
説明致します。



底が編めたら
立体にしていきます。
オスロの皆さんは本当に手際も良く
丁寧に作業されていました。
作品にとっても暖かみがありました。
1日目、2日目とプレゼンテーションを
して頂いたのですが、シャイな方も多かっ
た様に思います。ですが、しっかり自分の
作品については話されていました。





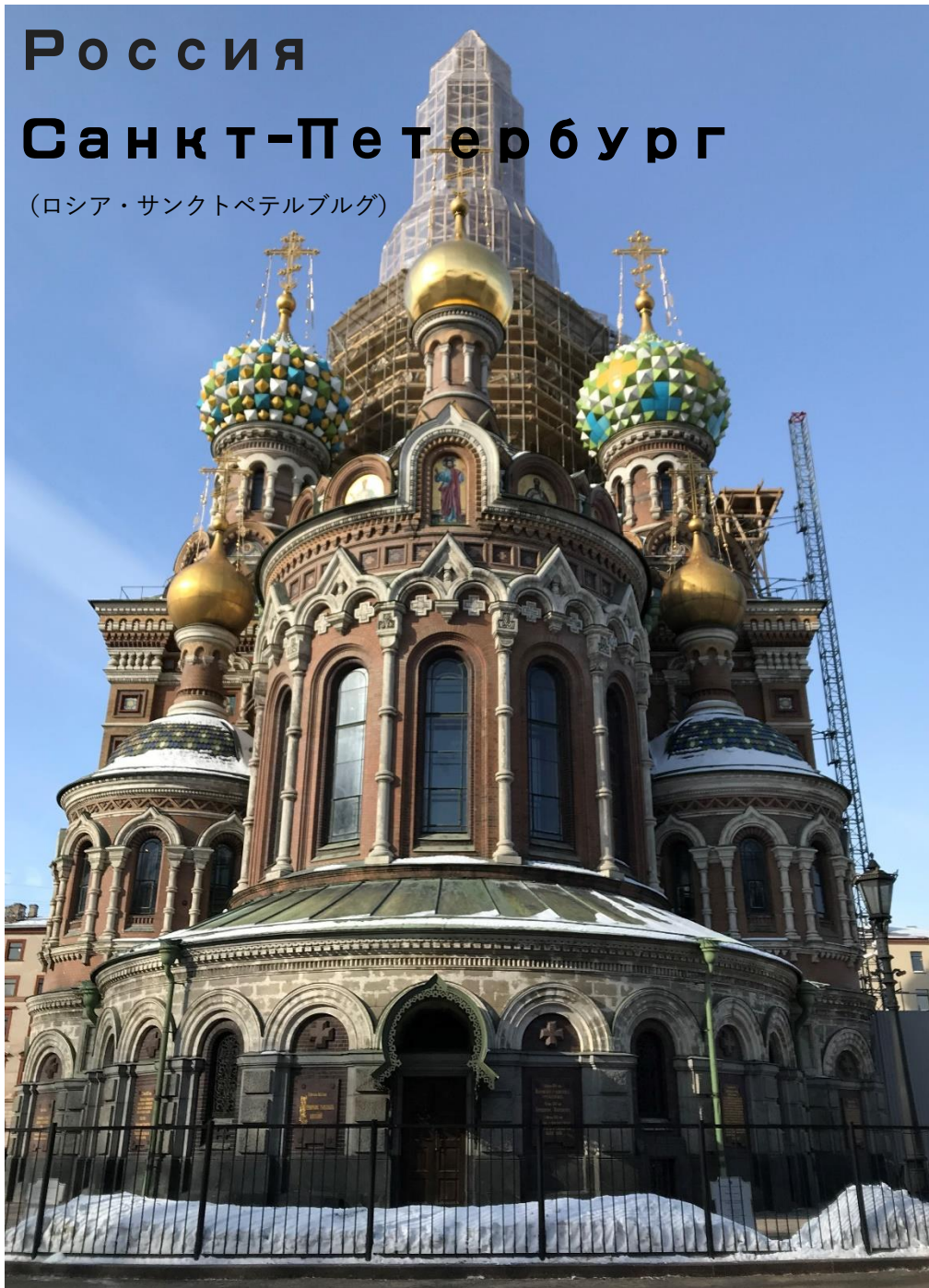
ワークショップ2回目

世界で1つだけの花籃

Россия

Санкт-Петербург

(ロシア・サンクトペテルブルグ)



2 か国目の都市、ロシアのサンクトペテルブルグの、Botanic Gardens of the Komarov Botanical Institute
〈サンクトペテルブルグ国立植物園〉 (<http://www.bgci.org>)

3月5日 (月)

11:00より講演

14:30よりワークショップ (主に植物園職員)

3月6日 (火)

15:00より Stieglitz State Academy of Art and Design 〈アレキサンダー・スティーグリッツ・アカデミー〉
(<http://ghpa.ru/>) にて短時間の講義つきワークショップをさせていただきました。

サンクトペテルブルクでは、3月になると日本と同じように春が訪れるそうです。ですが、私が行った時は、例年よりも寒く、着いた日は-10度で、まだまだ道にも雪がつもり、大きな氷柱もあちこちに見られました。サンクトペテルブルク市内を流れるネヴァ川 (Heba) も、厚い氷を張ったままでまだまだ寒い日が続くサンクトペテルブルクでした。



3月5日（月） 11：00- 講演

Ботанический сад Ботанического института им. В. Л. Комарова РАН

Botanic Gardens of the Komarov Botanical Institute

サンクトペテルブルク植物園（コマロフ植物研究所植物園） <http://www.bgci.org>

ロシアで最も古い植物園の1つで、300年以上続いています。

ロシア科学アカデミーが運営しています。8万種以上の植物が栽培され、素晴らしい規模と、歴史を持つ温室には、3種類の竹も育てられていました。講演とワークショップの合間に温室も見学させて頂き、サンクトペテルブルクにて世界中の草木、花々を見る事ができました。

植物園の職員と、一般の方を対象にした講演では、月曜日の午前中と言う事もあってお越し下さる方が少ないと懸念されていましたが、実際は、11時に始まる頃には予想を超えるお客様が講演を聴きにきて下さりました。有難い事に、途中何度か座席の補充をする程でした。大勢の方が「竹」に興味を持って下さるのは本当に嬉しい事です。講演の内容は、ノルウェーのオスロでさせて頂いたものと同じです。こちらでも皆様、本当にとても熱心に聞いて下さりました。実際になかなか触れる事のできない日本でしか自生しない貴重な竹や、400年前の煤竹も触って頂き喜んで頂きました。講演後の質問の時間は、30分以上とったにもかかわらず、講演後も大勢の方が前まで質問にお越し下さり「竹」について色々質問して下さいました。



3月5日(月) 14:30- ワークショップ

Ботанический сад Ботанического института им. В. Л. Комарова РАН

Botanic Gardens of the Komarov Botanical Institute

サンクトペテルブルク植物園 (コマロフ植物研究所植物園) <http://www.bgci.org>



植物園の職員の方を主と対象としたワークショップでした。

参加した下さった方々の中には、日本語を勉強中の方や、日本の生け花をされている方も数人おられました。

また、数名一般の方もいらっしゃいました。

その中には、バスケット作家の方もお越しくださいました。その方は、私と Facebook でつながっている方でした。サンクトペテルブルク植物園へ行く事を Facebook に書いていたのを見て植物園へ問い合わせ参加して下さりました。SNS の発達で遠く離れていても同じ「編む」事につながる方とお会いする事ができました。

また、夕方のニュースで放送されるテレビ撮影の取材を受けました。

皆さん、花籃を本当に丁寧に制作して下さいました。途中からオリジナルの作品を考える時も生け花の経験からとてもお花が映える籃が多かったです。どれも力作ぞろいで、全員の方にコンセプトを発表してもらいました。





Stieglitz State Academy of Art and Design

3月6日(火) 15:00より 講義・ワークショップ

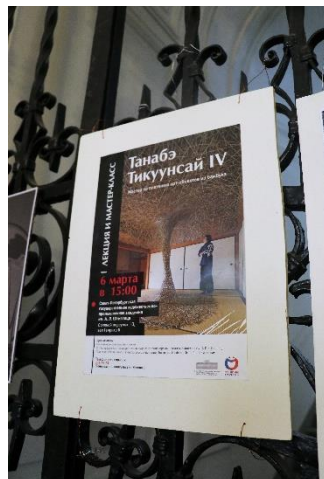
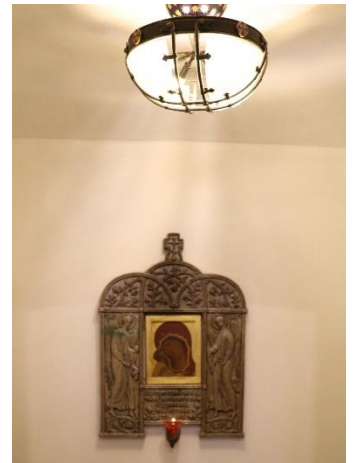
Stieglitz State Academy of Art and Design

シティグリッツ記念国立芸術・産業アカデミー (<http://ghpa.ru>)

1876年創立の美術学校

歴史深く素晴らしい建物の美術学校で、
全体が博物館の様でした。

先生、スタッフの人数は約200名、
生徒数約1500名で、宮殿のような建物
の中に、絵の具を持った学生が、沢山行き来していました。
あらゆるところに彫刻や、
レリーフがありました。



こちらでは、約40分ほど教室で講義
その後、移動して直ぐ傍のスペースで、工芸の生徒
20名とワークショップをしました。



教室の講義では、予定では20名のワークショップ参加者の予定でしたが口コミで広がり、聞いていた生徒の数よりも多くの生徒が参加して下さりました。



ノルウェーのオスロ、ロシアのサンクトペテルブルク、どちらの国の方も若い方々も熱心に聞いて下さりました。ロシアにも、ロシア独自の伝統的な工芸や、技法があります。



後継者不足問題や、未来に技術を残して行く事などの難しさ、消費者の多種多様な好みや流行りのものなど、どの国も工芸、伝統的な作品には同じ様な悩みがあります。



いつもよりも短い講義の中で、自分自身がなぜインスタレーションを積極的に取り組むのか、「伝統とは挑戦」で時代にあった新しい事に挑戦していく事が次の伝統へとつなげていけるという田辺家の家訓などが、短い時間でしたが、なんとか皆様へお伝え出来たと思います。講義中も質問時間を設けたのですが、足りず講義後も、ワークショップの場所へ移動する少しの合間にも色々な質問をして下さいました。



ロシアでは自生する事が難しい「竹」を沢山の方が興味を持って下さることに感謝の気持ちでいっぱいです。





その熱心な姿や、校舎の雰囲気からもとてもアカデミックなイメージでしたが、1人、1人の生徒の方々皆さんが個性的で素敵な作品を制作して下さいました。1人ずつコンセプトや想いも発表してもらいました。日頃から手先を動かされている美術学校の生徒さん達なので、とてもクオリティの高い作品ばかりでした。



20名の参加のワークショップの予定でしたが、2名に1つの「竹のヒゴ」で作品を制作する生徒の方もいらっしゃいました。竹の種類の説明もしたのですが皆さん、竹を撫ぜたり、中をのぞいたり匂ったりと思いつきに竹に触れて下さいました。



参加者の方に前にきてもらいましたがその他の生徒の方も興味を持って下さり制作方法を見学して下さいました。



この日の事が写真付きで紹介されていました。(学校のサイト)

http://www.gpha.ru/item/master-klass-i-lekciya-po-pleteniyu-art-obektov-iz-bambuka-2?category_id=49



花籃の底の部分の四ツ目編までは、
基本的な編かたですが、
立体になる所からは、自分のオリ
ジナルの作品になります。
コンセプトや、自分の想いで
世界に一つだけの花籃を制作します。



花籃の底の部分になる四ツ目編

底の平面から立体にします。



生け花も初めての方も沢山いらっしゃいましたが素敵な作品、
斬新な作品、力作揃いでとても良い作品が並びました。



まとめ

ノルウェーのオスロ、ロシアのサンクトペテルブルグと、短い滞在でしたがこの2か国に「竹工芸」を紹介でき本当に感謝しております。北欧の方々に「竹工芸」を知ってもらう事。

ロシアのサンクトペテルブルグへ行く事は、私の1つの夢でもありました。

世界三大美術館で、インスタレーション制作を発表したい思いがあり、

2017年度は、アメリカのNYのメトロポリタン美術館では発表する事ができました。

今回の日本ブランド発信事業に参加させて頂き、その夢の一步が近づいた様に思います。

これから挑戦していく事、日々精進していく事は、多々ありますがこの経験やチャンスを生かせる様

今後とも努めたいと考えております。

今回の滞在を振り返り、末筆ながら外務省の皆様、在ノルウェー日本国大使館の皆様、在サンクトペテルブルク日本国総領事館の皆様、事前に凄く竹の事を調べて下さったロシアの通訳のエカテリーナ様、各地でお世話になった皆様方、このような素晴らしい機会を設けていただき改めて感謝申し上げます。

この場をお借りして深い御礼を申し上げて、報告を終えさせていただきます。

誠にありがとうございました。

参考リンク

● [外務省 日本ブランド発信事業サイト](#)

● [田辺竹雲齋 サイト](#)

● ノルウェー（オスロ）

Kunsthogskolen I oslo

Oslo National Academy of the Arts

<http://www.khio.no>

● Stieglitz State Academy of Art and Design

シティグリッツ記念国立芸術・産業アカデミー (<http://ghpa.ru>)

竹雲齋のワークショップが掲載されているページ

http://www.ghpa.ru/item/master-klass-i-lekciya-po-pleteniyu-art-obektov-iz-bambuka-2?category_id=49